Sirius

WING

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｉｒｉｕｓ

【Ｎコード】
Ｎ２１７７Ｙ

【作者名】
ＷＩＮＧ

【あらすじ】
白銀の町、『シルバーパレス』に生まれた漆黒の髪と目をもつ少年、シリウスの物語。

登場人物紹介？

シリウス・エーデル
Ｌｅｖｅｌ１
歳　１４
家柄　エーデル公爵家

主人公。　黒髪、　黒目の整った容姿をもつ。　非常に賢く、アビリティ国立第一学校では１学年主席を誇る。運動がかなり不得意（魔法による身体能力強化で対策している）。　魔法はかなりの腕前。レーラを溺愛している。アレンとは親友（幼なじみ）。

アレン・ラインフォード
Ｌｅｖｅｌ１
歳　１４
家柄　ラインフォード男爵家

焦げ茶色の髪に金色の瞳をもつ。　成績は平均的。　しかし、　身体能力に優れており、　魔法を使ったシリウスにも引けをとらない。
シリウスの親友（幼なじみ）。

レーラ・エーデル
Ｌｅｖｅｌ１
歳　１３
家柄　エーデル公爵家

シリウスの妹。　兄と同じ黒髪、黒目の美少女。　優しく、素直な

性格。　だが本質的には兄とよく似ている。　魔法が得意でかなり賢い。　しかし、　一般常識が欠落している部分がある。

ヴィンセント・エーデル
Ｌｅｖｅｌ１
歳　　？？
家柄　　エーデル公爵家

エーデル公爵家当主。シリウスとレーラの父。普段は優しく、家族思い。しかし、貴族としての顔は厳しく、敵に対して決して温情をかけない、冷酷な一面をもつ。

アリア・ジェベール
Ｌｅｖｅｌ１
歳　　２４
家柄　　ジェベール子爵家

若くしてエーデル公爵家のメイド長。それだけあってかなりの知能と魔法力を持っている。つなに冷静沈着な性格で、幼い頃からエーデル家に仕えているため、ヴィンセントへの忠誠心は高い。シリウスとレーラのことを気にかけている。

第1話　白銀の町と真っ黒な瞳（前書き）

昨日から色々と削除したりしてすいません（泣）

初めて小説を書くもので、　少し不安ですが、　頑張っていきたいです。

荒らしはご遠慮ください。
感想よろしくお願いします。

第1話　白銀の町と真っ黒な瞳

『本当によろしいのですか？』
『あの御方の決めたことです…。　それにこの子にとってはその時がくるまでまで知らぬ方が良いのでしょう……。　約束してください。　しかるべき時がくるまでこの子を守ってくださると。　そしてこの子に相応しき知識を与えてくださると。』

深夜に真っ黒なマントを羽織った男女がヒソヒソと声を潜めて如何にも深刻そうな声音で話していた。

『……引き受けましょう。
この身に代えてもお守りしてみせます。』
『ありがとう……。　なんとお礼を言って良いか…。』
『……それよりも、これから貴女はどうなさるのですか？』
『……私はこの町から出て、　何処か静かな場所で暮らしていきたいと考えています。』
『しかし……。　貴女ほどの方がこの白銀の町を出ていくなど…。
わかっておいでなのですか？』
『僅かな例外はありますが……。　私でなくても1度この町を出たら簡単に戻ることができないくらい、承知していますわ。』

最後の方だけ少し自嘲ぎみな声音だった。

『ならば何故ですか。　貴女は貴重な戦力だ。　これからのこの町には必要な人材のはずです！』
『…ありがとう。　でも私ではもう役には立てないわ。　この身体に残された時間はあまりにも短すぎる。』
『……まさかッ！』

『いいですね。　エーデル。　この子の力はいずれ必ず必要になります。　貴方はこの子を正しき道へ導いてください。　…ああ、もう行かなければ。　さようなら、　エーデル。』

女が手をひとふりすると、　エーデルの意識は闇に飲まれた。

倒れたエーデルの腕の中に赤子がいた。　漆黒の目が女の瞳をみつめている。

『さようなら。シリウス……。　』

女は優しい笑みを浮かべてシリウスにキスした。

しばらくシリウスを見つめていだが、　最後にもう一度悲しげに微笑むと、その姿は一瞬にして消えてしまった。

第2話　シリウスの日常

『……　我々魔法使いは古くからこの国の発展に力をそそいできたのです。　』

ここはこの国一番の名門校。
国立アビリティ第一学校1年生の教室。　女王陛下に優秀と認められた者、　もしくは優秀な家柄の者しか入学を許さないエリート中のエリートの学校。

『ミスター・エーデル。我ら魔法使いが何故このシルバーパレスとドラゴンパレスにしか存在しないのか、理由を述べなさい。』

指名されて、答えているのは漆黒のつややかな髪と目をもち、　10人とすれ違えば10人が振り返るであろう美貌の少年。
絹のようになめらかで真っ白な肌に、　瞳にはやや憂鬱そうな光がやどっている。
そして、　胸には学年主席を表す銀のバッチが光っていた。

『我らがこの町とドラゴンパレスにしか存在しない理由は、　外界の人間との思考の違いによるためです。　我らは選ばれた存在であり、　その才能を十分に生かしていく必要があり……』

少年――シリウスは教師の期待通りの答えをよどみなく上げていく。

『したがって我ら魔法使いと外界に住む一般人は能力が違いすぎるため、　互いに干渉し過ぎないようにするためです。　』

教師が満足げに頷き、
シリウスは席に座った。

『シリウス、　さすがだな！前回のテストでもぶっちぎりの１位だったし。』
『べつに……。　あんなもの、　将来なんの役にたつんだ。　あんなものより呪文の１つを覚えた方がずっと有意義だ。』
『まあ、そうかもしんないけど……ってお前、　そんなことといっておいて授業はずいぶん完璧だったじゃないか？』
『当たり前だろう。　あの教科をきちんとしておけばそれだけで模範的な生徒としてみなしてくれるからな。』
『……。』
『どうしたんだ。　アレン。』
『いや、　名門エーデル公爵家のお坊っちゃまには全く見えない発言だと思ってな。』
『嫌みか？はっ。　別に普段は扱いやすい優等生を演じているだけだ。』
『お前って…。　本当にひねくれてるよなぁ。　少しは素直になれば良いのに。』
『無理。』
『いや、　そんな笑顔で言われても…。』

つくづく徳な顔だよなと思う。
こんな話をしているのに、　はたからみたら、　単に親しげに話しているようにしかみえない。

『えっと。　シリウス君！』

ほら、　また来た。

にっこりと天使の微笑みを浮かべる悪魔。

『俺に何か用かな？』

こんどは告白か、　それともデートのお誘いか。

『こんどの休暇暇かな？もし良ければうちの家でパーティーをするの。　よかったらシリウス君もどうかな？あっ、　アレン君も。』

真っ赤になりながらいう少女。

確か彼女はどこぞの子爵家の令嬢だったか。

『ごめんね。　休暇の予定はすでに入れてあって……』

本当に申し訳無さそうな声音でいう。

『僕も予定があって…。ゴメン。』

『そっか…。　じゃあ、２人とも休暇を楽しんできてね。』

がっかりして帰っていく女生徒。

『…断って良かったのか？今のやつ、　たしか子爵家のご令嬢だろ？』

『ああ。　ハント子爵家のな。』

『……答えてないぞ。』

『１人に付き合うと全員と付き合うハメになる。　お前は俺に死ねと言いたいのか。』

たしかにシリウスにはこういう「お誘い」が日に１０件はくる。

いちいちかまっていられないのだろう。

『まあ、　それはそうだが…。　』

『そんなに行きたいならお前だって行けば良いだろう。』

嫌だ。　何が悲しくてシリウス目当てのパーティーに俺が参加しないといけないんだ。

『まあ、　そんなことよりアレン。　午後は呪文の練習をするぞ。』

『令嬢の誘いをそんなことか……。　まあ、　俺も勉強はお前とやった方が効率良いしな。』

『決まりだな。　じゃあ、　午後は瞬間移動の呪文を練習する。』

『っ！！　聞き間違いだよね！？　俺たちまだ1年だよ！？　瞬間移動の呪文は5年までならわないぞ！』

『大丈夫だ。　俺に出来ないことはない。　』

天使の顔で、　このうえなく傲慢な発言をする少年、　シリウス。アレンはこの少年と親友となったことを若干後悔しつつ、　地獄の呪文練習に付き合うのだった。

第3話　パーティーの夜

ここは、　アビリティ帝国の首都、　『シルバーパレス』。
白銀に輝く、　この国1美しいとうたわれる、　選ばれた者の住まう町。

そしてこの国には、　貴族の爵位とは別に、　生まれた時に人間を選別する制度があった。

Ｌｅｖｅｌは１～１０まで。
数字が０に近づくほど、　その人間が優秀ということである。
この数字は公表されるものではないが、　このシルバーパレスにはＬｅｖｅｌ２以上の人間しか入ることは許されない。

他にも様々な法があり、　この国の人間を縛っていた。

『シリウス様。　シリウス様は何かお好きな物はありますか？』
『シリウス様、　今度是非我が家に遊びに来てくださいませ。』
『シリウス様、　私とダンスを踊りませんか？』

『……。』

ああ、　鬱陶しいっ！！
わかっていた。　パーティーに来ればこうなるということは。　しかししょうがないではないか！

『シリウス兄様。　今度私の友人が開くパーティーに、　一緒に出席してくれませんか？』
『珍しいな。　レーラがパーティーに行くなんて。　』
何でも、　レーラは断りたかったが、　その友人は有力な侯爵家の令嬢で、　断りきれなかったらしい。
そして、　シリウスが溺愛する妹の頼みを断れるはずもなく、　今に至る。

『ゴメンなさい…。　アレン。　』
『いや、　良いよ。　俺も久しぶりのパーティーで楽しめたし。　』
非常に申し訳無さそうな声音でいうレーラ。
こちらは兄と違って本心だろう。

兄ととてもよく似た容姿をもつ絶世の美少女。
艶やかな黒髪に漆黒の目。そして真っ白でなめらかな肌。

『それよりもいいのか？　まだレーラと話したい人は山ほどいるみたいだけど…。　』
『流石に今日はもう疲れました…。　』
かれこれ2時間以上も談笑していた（演じていた）らしい。
『それより、　アレンはどうなんですか？　アレンと話したがっている人だっていますよ？』

たしかにアレンの容姿は悪くない。
癖のある焦げ茶色の髪に、　透き通る様に綺麗な金色の瞳。　普段、
　シリウスの陰に隠れているが、　アレンもそれなりに整った容姿
をしている。

『良いんだよ。　俺は。　シリウスに任せておけば。
どうせ、　家の自慢話しか聞かされないし。』

ちなみにアレンの家、　ラインフォード家は男爵位である。

『あっ。　兄様が逃げました。』
『ご令嬢が追いかけてきた…ってなんであいつはこっちにくるんだ
！』

急いで逃げようとしたが、　間に合わなかった。
珍しく髪を乱したシリウスは必死の形相でいった。
『レーラっ！　悪いが一緒にダンスを踊ってくれないかっ！？』

あとで理由を聞くと、この時シリウスは１０名ほどの女性にダンス
を迫られていたらしい。　普段、　シリウスの陰に隠れているが、
　アレンもそれなりに整った容姿をしている。

『良いんだよ。　俺は。　シリウスに任せておけば。
どうせ、　家の自慢話しか聞かされないし。』

ちなみにアレンの家、　ラインフォード家は男爵位である。

『あっ。　兄様が逃げました。』
『ご令嬢が追いかけてきた…ってなんであいつはこっちにくるんだ

！』

急いで逃げようとしたが、　間に合わなかった。
珍しく髪を乱したシリウスは必死の形相でいった。
『レーラっ！　悪いが一緒にダンスを踊ってくれないかっ！？』

あとで理由を聞くと、この時シリウスは１０名ほどの女性にダンスを迫られていたらしい。

第４話　パーティーの夜２

『助かったよ。　レーラ、　本当に。』
『兄様も大変でしたね…。』

今、　シリウス、　アレン、　レーラはパーティー会場の城の庭で夜風にあたっている。

『……というか、　アレン。　お前が逃げ回っているから、　お前の分まで俺が引き受ける羽目になったんだぞ。』
『あっ。　やっぱり気づいてたんだ。』
『当たり前だろうっ！！』

アレンは、　ご令嬢方がやってくるなり、　全員、　シリウスに押し付けてしまったのである。

『でもさ、　シリウス。　女の子達も喜んでたよ？　未来の公爵様とお話できて。それに、俺は無理やり連れてこられたんだし。』
『っ！！』

（ああ。　アレン、　今日は何か予定あるか？）
（いや、　とくにないけど？）
（丁度よかった。　今日、　お前の家に迎えにいくからな。）
（は？）
（いや、　レーラの友人の家に行くんだが、　その友人が俺とお前にも是非来てほしいと言っていたらしいんだ。）

（珍しいな。　お前が他の家に行くなんて。　）
（レーラの友人だからな。　お前もきちんとした格好にしておけよ。　）
（しょうがないな…。　わかったよ。　じゃあ、　また後でな。　）
（ああ、　また後でな。　）

『パーティーが開かれるなんてきいてなかったなあ。　俺は。　あの会話の流れじゃあ、　誰だって少しお邪魔するだけだと思うんじゃないか？』
『はっ。　俺は嘘は言っていないぞ。　』
あ、開き直った。
たしかに嘘は言っていない。　さっしの良い人ならばあの会話でシリウスの本音を見抜けたかもしれない。

つまり、　アレンはシリウスの笑顔にすっかり騙されてしまったのである。

長年一緒にいる自分でさえこれだから、　シリウスを初めて見る人間がすっかり騙されてしまうのは当然のことかもしれない。
『ふん……。　』

シリウスも夜風にあたり、　気分が落ち着いてきたみたいだ。

『どうしますか？　一応こちらのご当主様に挨拶もいたしましたし……。　』
『そうだな…。　』
『うん。　それじゃあ、　今日はお開きかな？』

そんな会話をしている時だった。
突然城の方から闇を切り裂くような悲鳴が聞こえた。

第5話　パーティー、閉幕

シリウスたちが会場に、　戻ると、　そこは地獄と化していた。
様々な色の呪文が飛び交い、　その度に人が死んでいく。

『『『シールドッ！！』』』

3人はすぐさま障壁をはり、目の前の敵を見た。

『……なんなんだ。　あの敵は…。』

この場にいるのは、　奴隷や使用人をのぞき、　全員がＬｅｖｅｌ２以上の優秀な者達である。
それも約半数が魔法使いという極めて戦闘能力の高い者ばかりである。
それを易々と殺戮しつくしていた。
おそらく、　今の時点でさえ、　生き残りは半分もいないであろう。

『だめだシリウスっ！！　障壁が持たないっ！！』
『レーラッ！　少し時間を稼いでくれっ！！』
『わかりましたっ！！
ファイアー・ストームッ！！』

レーラは優秀な魔法使いだ。　僅かな時間ならば問題ない。
しかしである。

この敵は何なんだ？

これまで見たことの無い装備。　そして全員が深紅のマントを着ている。　そのマントには黒い鳥のような紋章が入っていた。

『シリウス兄様っ！！もう味方の障壁がもちませんっ！！』
『もう少しで応援がくるはずだっ！！
……我が命に応えよ…吹雪の女王よ……契約に従い我が敵を打ち滅ぼせ…コールド・インスピレーションッ！！』

冷気が敵を一瞬で凍りつかせた。

『！！　流石ですっ！！シリウス兄様！』
『……待て、レーラッ！！』

敵の氷が、　みるみるうちに溶けていき、　再生してしまった。

『くっ！！』
『シリウス、　何か対策はないのか！？』
『言われなくてもわかってるっ！！』

この敵は魔法がほとんど効かない。　逃げるという手もあるが、それでは町に被害が及ぶかもしれない。
瞬間移動や飛行の呪文は上級呪文の１つで、　魔力を大量に消費した今は魔力を集中するのに時間がかかる。　何よりこの魔法は使える人数が少なすぎる。

『兄様っ！！障壁がっ！』
『シリウスっ！！』

『……アレン。　レーラを頼む。　瞬間移動は無理でも飛行は出来るだろう？』
『ッ！？　兄様はどうなさるのですかっ！？』
『俺は残るよ。　まだ魔力がもつし、　魔法が使えない人も残っているから。それに俺は時期公爵として皆を守らないと。　』
『では、　私ものこりますっ！』
『だめだ。　アレン…頼む。　』
『…わかった。　……気をつけてな。　シリウス。　』
『はっ。　誰に向かって口をきいている。　俺が負けるはずないだろう。　』
『嫌です…。　私だけ避難するなんて……ッ。　』
『レーラ、　この場に俺たちがいてもシリウスの邪魔になるだけだ。　』
『……ッ！！』

『また後でな。　シリウス。　』
『ああ、　また後で。』

その言葉を最後にアレンとレーラは空高くに飛び去っていった。

シリウスは敵と戦っていた。　応援もきたが、　全く形勢は変わらない。

『くっ……！！』

しかし、　何となくだがわかってきたこともある。　この敵はあきらかに何か、　もしくは誰かを探している。　この敵の目的が殺戮だったなら、　おそらく自分達はとっくに全滅している。
敵と自分達にはそれほどまでの実力差があった。

『……くッ！！』

防御が間に合わず、　足に呪文が当たってしまい、　床に倒れてしまう。
急いで反撃しようと呪文を唱えたが、
それよりも速く敵の呪文が襲ってきた。

深紅の閃光がシリウスの胸を貫いた。

第6話　パーティー、閉幕2

不思議な感覚だった。
確かに貫かれたはずなのに、　痛みすらない。
何も考えられない。
ただ、　理解できるのは今、　自分を支配しているのは純粋な怒りだということ。濃密な魔法のオーラがシリウスを包みこんでいく。

『貴様らごときが、　この私に刃をむけるのか……っ！！！』

自分の身体が勝手に動いている。

『やはりっ！！』
『ここにいたのかっ！　死に損ないめがっ！！』
『貴様のでる幕などないわっ！　死ね！！』

敵が自分に向けて何か言っているが何も聞こえない。　ただ、　わかっているのは、　もうこの場には自分と敵しかおらず、　自分はこの敵を滅ぼさなければならないということ。

『己の罪を悔やむがよい……。　ダークネス・インスピレーションッ！！！』

その瞬間、　一瞬、　全ての光を闇がのみこんだ。
そして次にシリウスが目にしたのは、　傷もなく、　さっきまでと

何ら変わらない敵。　それが一気に倒れ伏した。　その全てが顔に紛れもない恐怖を浮かべ、　死んでいた。

シリウスはそれを見て、　狂ったように笑い続けていた。

自分が何をして、　何を感じているのかすらもわからないまま。

第7話　その後

『……？』

『……あっ、　旦那様！　レーラ様！　シリウス様がお目覚めになりましたっ！！』

自分の顔を見るなり叫びながら部屋を出ていくメイド。
それで意識が覚醒した。

ここは自分の部屋だ。

シリウスがそれを認識するのにたっぷり３０秒はかかった。
何故だろうか。　ひどく懐かしく感じる。

『シリウス兄様っ！！　ご無事で本当に良かった……。』
部屋に入るなり、　レーラは自分に抱きついていた。
『大丈夫か？　シリウス。
目覚めたからといって無茶をするんじゃないぞ。しばらくは身体を休めなさい。　学校にも連絡しておこう。』

苦笑しながらレーラの後から入ってきたのは、　父、ヴィンセント・エーデル。　黒髪に金色の目の美しい容姿をもち、
相変わらず、とても４０手前には見えない。

『父上…。　そんな大袈裟な…。
私は大丈夫ですから。』

自然と顔が綻んだ。

『なにを言う。　1週間も寝込んでおいて。』
『1週間！？』

流石に唖然とした。
通りで自分の部屋に懐かしさを感じるわけか。

『そうです、　1週間です、　兄様。　だからしばらくは休んでいただけますね？　私も父様も心配したんですから……。』

泣きそうな表情でレーラに迫られては反論出来ない。

『まあ、　たまにはいいだろう？　　ああ、　そうだ、　後で食事を持ってこさせよう。』

そこで初めて自分が空腹な事に気づいた。

『それまでは、　本でも読んでいることだな。　間違っても呪文の練習などするんじゃないぞ？』

苦笑するしかない。見抜かれていたらしい。
呪文の練習は魔力の消耗が激しい。　病み上がりにするものではないが、　正直な話、　シリウスの魔力と体力はすでに回復していた。

『いや、　父上。　私の魔力はもう回復していてですね…。　』

『大丈夫です。　父様。　私が兄様を見張っておきますから。　』

天使の笑顔とともにレーラがだめ押しした。

『レーラ……。』

『ああ、　頼んだぞ。レーラ。』

ヴィンセントは笑いながら部屋を後にした。

（ああ、気持ち悪い。）

レーラとヴィンセントが部屋を出ていった後。
シリウスはあの夜の事を思い出していた。

自分が自分ではないように身体が動き、　それまでは見たことすら
なかった最上級の闇の呪文を容易く扱っていた自分。　自分の中に、
　自分ではない者がいるような感覚。

恐怖もあるが、それ以上に気持ち悪かった。
そして、今あの夜の事を思い出して見ると、敵は十中八九、自分の事を狙っていたのだろう。
敵は自分に何かを喚いていた。
そんなセリフを言われる様な事は身に覚えがない。　公爵家に恨みのある者たちの仕業かとも思ったが、　それならば、　レーラが逃げるのを許さないはず。
敵は、　自分だけに用があったのだ。

シリウスは長い間考えていた。
この事は父に言った方が良いかも知れない。
敵が普通の魔法使いならば良い。
自分の周りにはＬｅｖｅｌ２以上の優秀な魔法使いが沢山いる。
しかし、　あの敵はＬｅｖｅｌ１の者も沢山いた場で殆どの者を殺戮しつくした。

自分１人で解決出来る問題ではない。

シリウスは決断した。

父に全て話す事を。

……自分に起こった事を除いて。

第8話　ロストタウン

ここはシルバーパレスより南に２０ｋｍほど離れた場所。
ロストタウン。
生まれた時に「劣悪」とされた者たちが集まる場所。
住んでいる住人も皆みすぼらしい格好をしている。　ここにはシルバーパレスの様に魔法使いなど存在せず、　満足な医療機関すらない。

そのロストタウンの地下深く。　ざっと３０人程であろうか。　赤いマントを羽織った人間達が１人の少女にむかって跪いていた。

『……では、　シルバーパレスに行っていた仲間達は、　皆死んでしまったのね……。』

『……そのようです。　申し訳ありません、　シエラ様…。』

シエラと呼ばれた少女は、　白銀に輝く髪に、　漆黒の目、　１度も日に当たったことが無いような真っ白な肌、　全てが整った顔立ちをしていた。

『良いのです。　しかし、　あやつが目覚める前に倒さねばなりません。　シルバー、　ドラゴン、　クリスタル、　サファイア、　アクア。　この国の５大都市を我らの手に取り戻すのです。』

『……封印するのですか？』
『……今の私達にはあやつを滅ぼすことは不可能です。　先の戦いで我らは力の半分を失ってしまいました。　しかし、あやつも身体を滅ぼせば少しの間ですが、　時間を稼げるでしょう。今あやつを縛っている封印が解ける前に新たに封印しなければなりません。』
『……承知いたしました。　』

そこでシエラは微笑んだ。　それはまるで聖母のように清らかな笑みだった。

『皆さんに私の祝福を授けましょう。
我が命に従い、　我が敵を射ち滅ぼしなさい。　』

『シエラ様は「あの人」を本気で封印するつもりなのでしょうか……。　』
『本気でしょう…。　わかっていると思うけどベラ、　私達の主はシエラ様よ。
シルバーパレスの王者はシエラ様ただお一人よ。　あの人ではないわ。　』
『わかっているわよ。　』

ベラと呼ばれた少女は少し憤慨したように言った。
『ただ、　私はシエラ様が「あの人」を…。』

『その先は禁句よ。　……ああ、　そういえば私はアクアパレスに行くことになったの。　だから暫くは会えないわよ。　』
『えっ！　ユーリも！？』

ユーリと呼ばれた女性は少し悲しげに言った。

『シエラ様の命が下ったわ。　あの場所も封印し直さなければならないから。　』
『……。　』
『そんな顔しないで。　今回はそんなに危険な役目じゃないの。あの場所に封印を阻む結界があるからそれを壊すだけよ？』

ユーリは笑って言ったが、　ベラの気持ちは晴れなかった。

結界を壊すだけと言っても、　それは封印する人よりも町の奥には入らないため、　危険が少ないと言うだけだ。　それにこの結界は普通の結界ではない。

それでもベラは笑顔を浮かべて見せた。

きっとユーリの方が不安と恐怖でいっぱいだったはずだから。

『うん。　それなら少しは安心かな。　頑張ってきて！！』

……それに、私達がシエラ様に逆らうことは出来ないから。
絶対に。

町の紹介？（前書き）

この説明は見なくても問題ありませんので興味のある人だけ見てください（笑）？

町の紹介？

シルバーパレス

Ｌｅｖｅｌ２以上の者しか入ることを許されない（奴隷や使用人は別だが、主人の屋敷以外は出歩けない）。　住んでいる住人は２／３程が魔法使い。　残りの住人も頭脳や身体能力が優れている者ばかりで、きらびやかな印象を受ける。
アビリティ帝国の首都で白銀に輝くこの国１美しい町。女王陛下が住んでいる城と、　この国を創ったとされる神を祀る神殿がある（王族はこの血をひいているとされている）。町と外界を隔てる城壁がある（町に入るための入り口は１つしか存在しない）。

ドラゴンパレス

　Ｌｅｖｅｌ３以上の者しか入ることを許さない。
神殿があり、　魔法使いよりも技術者や科学者が多い。　シルバーパレスの北に位置する町。　この国で第２の大きさを誇る。
町と外界を隔てる壁が存在する。

クリスタルパレス

Ｌｅｖｅｌ３以上の者しか入れない。名前の通り、　ガラスで作った物が沢山存在する。　この町の神殿は、　５大都市の中でもかなりの大きさと美しさを誇る。
シルバーパレスの北西に位置する町。
町と外界を隔てる壁が存在する。

サファイアパレス

Ｌｅｖｅｌ５以上の者しか入れない。この町の名前は、　周辺の土地から宝石や魔法石が沢山とれるため。この町には宝石の店が数多くある。　そのため、多くの技術者達がこの町に住んでいる。この町の神殿には数多くの宝石や魔法石の装飾品が飾られており、見るものを圧倒させる。シルバーパレスの西に位置する。　町と外界を隔てる壁が存在する。

アクアパレス

Ｌｅｖｅｌ５以上の者しか入れない。　名前通りの水の都。外国との貿易が盛んで、この国の繁栄を象徴している町。　この町での移動は主に船を使う（運河が全ての道を繋いでいるため）。　町の中央の中央湖には神殿が浮かんでいる。　水に映る神殿と町並みが大変美しいと評判の町。シルバーパレスの南東に位置する。　町と外界を隔てる壁がある（港側には存在しない）。

ロストタウン

生まれたときにＬｅｖｅｌ８以下とされた者たちが住んでいる町。
　満足な医療機関もなく、　魔法使いも存在しないため、　病気が蔓延しやすい。　そのため、　町には活気がなく、　さびれている。

シルバーパレスの南に存在する小さな町。

第9話　夢幻の対面

『レーラ様、　兄君はご無事でしたか？』
『療養しているとお聞きしていますが…。』
『テロに巻き込まれたとか…。　』

ここはシルバーパレスにある、　女学院。　名門、　私立リリウム女学院。
毎年数多くの国立学校合格者を輩出する名門中の名門校である。
比較的、　貴族が多く、　お上品な印象を持たれることが多い学校だが、　噂話が好きな所は、　他の学校となんら変わらないとレーラは思う。
兄のことや、　自らもテロの現場にいたせいか、　次々に質問が浴びせられる。　もう、　最初の質問なんて忘れてしまった。

『皆様。　兄は来週から学校に行けるそうなので、もう大丈夫ですわ。』

にっこり微笑んで、女生徒達の口を封じる。
昔からこういう事が多かったレーラは、　笑顔が相手の口をふさぐ、最良の武器だということを知っている。

『まあ、　そうでしたの…。』
『レーラ様が言うのなら…。』
すごすごと引き下がっていく女生徒達。
おそらくこの1週間はこんな調子だろう。
レーラは密かにため息をついた。

リリウム女学院の生徒は、　基本的に寮で暮らす。　レーラの様に自宅から通う生徒は少数派にすぎない。　それでも、　校門に続く道には沢山の生徒がいた。
全員が白い生地の黒のワンピースに白のベルトというこの学校の制服を着用していた。

だからだろうか。
レーラは自分の前方に立っている少女に目を奪われた。
白銀に輝く髪が風になびいている。　真っ白な肌に豪奢な薄い金色

のドレスを着ている少女だった。

そんなとても目立つ格好をしているのに自分以外の人間は、　誰も、この少女に気がついていない様だった。

その少女は自分にむかって微笑んだ。　神々しさすら感じさせる笑みだった。

そして次の瞬間、　少女の漆黒の目が、　レーラの漆黒の目を貫いた。

声が聞こえる…。
この声は彼女のものなのだろうか？

（……取り返しに来ました。　全てを。）

頭の中に直接響いている様だった。　とてつもなく頭が痛い……。
見えているのは、冷酷な目で自分を見ている先ほどの少女。
（……貴女の力は兄君よりもずっと弱い様ですね…。私との会話も長くは持たないでしょう。）

少女がレーラの腕をつかんだ。　そのとき激痛がはしった。

（…そろそろ限界のようですね…。　兄君に伝えなさい。　真の王はこの私だと。　私は必ずそなた達を滅ぼしてみせる、　と。）

そして、　少女はもう1度微笑で、手を話した。

レーラの痛みが止まった。

息を切らしたレーラが顔をあげたとき、　そこにはもう少女の姿はなかった。

捕まれた腕には痣が残り、　頭の痛みの感覚も残っていると言うのに。

レーラはそれが夢幻の様に感じられた。

第１０話　アリアのドレス

『なんと言うか…。　アリア…。まさかとは思うが、この俺にこんな服をはけと言うのか？』
『何を言いますか。エーデル公爵家次期当主たるシリウス様がその程度の服で何を怖じ気づいているのでしょうか。』
『お兄様、一応着てみてはいかがでしょうか？』

普段、　シリウスは基本的に洋服に文句はつけない。メイド長のアリア、もしくはレーラに任せっきりである。　幼き頃より、　パーティー等に頻繁に出席させられていたシリウスにとって、　服を着こなすことなど造作もないことなのだ。
たとえ、　リボンやフリルがたっぷりついた、　いかにも夢見がちな少女の理想の『王子様』な服装とて、着こなしてみせる自信がある。
そのシリウスだったが、　この服装には流石に文句を着けた。

『…アリア、これはエーデル公爵家次期当主とか関係ないと思うが。というか、俺がこの服を着るのは人として間違っている気がするぞ。』
『しょうがないではありませんか。シリウス様は今でこそめったに舞踏会に出席することはありませんが…。以前は旦那様とご一緒によく出席しておられていました。それなりにお顔が知られておりますゆえ、いたしかたありません。』
『くっ……。』

言葉につまるシリウス。

『大丈夫ですわ。兄様なら、きっとお美しく、可愛らしいと思います。』
『レーラ、俺に可愛らしいといってもそれは嬉しくないぞ。俺は男だっ！！』

そう、アリアがシリウスに用意した服は、薄い水色の生地に、フリルとリボン、そしてブルーサファイアがたっぷりついた、豪奢なドレスだったのである。

…いうまでもなく、女物である。

『…俺は絶対に着ないぞ。』
『ですがシリウス様、普通の格好をしていくと、相手に気づかれる恐れがあります。』
『そうです。兄様。今回の相手はあの「ノーフォーク伯爵」なのでしょう？』

そう。今回、シリウスは父、エーデル公爵（ヴィンセント）に頼まれ、ノーフォークという伯爵家が開く舞踏会に出席することとなったのだ。しかも、ただ出席することが目的ではない。
ノーフォーク伯爵の監視と諜報活動という目的があるのだ。

このノーフォーク家というのは、ドラゴンパレスに屋敷をもつ家である。
なぜ、監視しなければならないのかというと、女王陛下から父に命令がくだったからである。
命令は簡潔だった。
「ノーフォーク伯爵に反逆の疑いがある。それを調査するのです。」

このノーフォーク伯爵という人は大変用心深い人ということだった。たしか、自身が若い頃は、ノーフォーク家はシルバーパレスに屋敷があったそうだが、他家の策略により、現在は没落してしまい、ドラゴンパレスに屋敷を移さなければならなくなったそうな。

そんな、不運なノーフォーク伯爵にかかった疑いだが、「さきの事件で莫大な被害をもたらした、反乱分子と繋がっている恐れがある。」とのことだった。

本当に面倒くさい。

しかし、シリウスもあの事件のことは自分にも関わりのあることだったので、自ら父に、「自分に諜報活動をさせてほしい」と頼み込んだのである。

自分たちを襲った連中の情報は皆無だったし、自分の中にある別人格のような力と衝動について、なにもわかることはなかった。正直な話、少しでも情報が欲しかったのである。

『…それでも女物はないだろう』

無駄な抵抗をするシリウス。

『シリウス様、お言葉ですが、黒目を持つ者は非常に稀です。見るものが見れば気づかれてしまう恐れがあります。』

そう。黒髪はともかく、黒目は世界でも稀な存在なのだ。昔は神の生まれ変わりといって、畏怖の対象にもなっていたらしい。

『そうですよ。兄様。　それにこんなに素敵なドレスを着られるん

です。もう少し喜んでもよろしいのでは？』

レーラが無邪気な笑顔でいう。
しかし、その言い分はシリウスが女なら通用するが、この場合だと、強烈な嫌味にしか聞こえない。

…もっともレーラは本心から言ったようだったが。

『嫌だ！　これは断固拒否するっ！』

このあと5時間にも及ぶアリアとの議論の末、シリウスはアリアにある条件をだした。

『俺にその格好をしろというならアレンにも舞踏会でドレスを着せることだ！あいつを説得出来たら俺も着てやるっ！説得できたらの話だがなっ！！』

……シリウスはこの時、アレンが了承するとは夢にも思っていなかったのである。

第11話　ノーフォーク邸

ここはドラゴンパレス、
「ノーフォーク邸」

この屋敷の中は様々な装飾品があり、見るものを楽しませる。
クリスタルパレスから取り寄せたと思われる、巨大なステンドグラスに描かれた女神は、陽光にあたり、光輝いており、非常に美しい。
天井にある豪華なシャンデリアにも、ふんだんに、まるで水晶のように透き通ったガラスが使われている。
廊下にある絵には様々な色の宝石や魔法石が沢山埋め込まれている。
失礼な話だが、とても没落した貴族の家とは思えない。
花壇の花は雪に覆われており、楽しむことは出来ないが、それでも来客を十分に楽しませることが可能だろう。

そこの来客室に、3人の美女がいた。
2人は黒髪、黒目の髪の長い絶世の美女。　姉妹のように良く似ている。もう1人は焦げ茶色の巻き毛のセミロングの少女。こちらも驚くほど美しかった。

（ね？　兄様、アレン。気づかれなかったでしょう？）

（…嬉しくないな。　俺はどこからどう見ても男だ！
……まあ、ここまできて気づかれても困るが。　エーデルの次期当主がこんな趣味を持っていると誤解されたら困る……。）

（ははっ。大丈夫だよ、シリウス。正直な話、相当似合ってるよ？）

（黙れ。）

（ええ。　兄様もアレンも良く似合っていますわ。）

本当に2人ともドレスが良く似合っていた。
シリウスは豪奢な水色のドレス。　ブルーサファイアがふんだんに使われたそのドレスは、涼しげな印象を与え、シリウスの漆黒の髪と目とのコントラストは非常に優雅なものだった。
アレンは薄い緑のドレス。
落ち着いた色だが、フリルが多く、アレンの巻き毛のこともあり、非常に可愛らしかった。

（良かったじゃないか、シリウス。レーラも誉めてくれたんだし。簡単にはバレないんじゃないか？）

（お前は何故そんなに楽観的になれるんだ。というか、そもそも、お前がアリアの頼みを断れば、俺がこんなことをするはめにはならなかったんだッ！）

――1週間ほど前

『アリアさん、俺に頼みごととは、どういったことでしょうか。』

『……そんなに緊張なさらないでも…。』

無理だ。　アリアが来たということはシリウスがらみの話ということだ。

そして、シリウスがらみの話で良いことが起こったことなど、ほとんどない。

『それで、内容なのですが…。』

自分に「断る」という選択肢はないようだ。

『アレン殿にドレスを着てもらいたいのです。』

『……は？』

聞き間違いだろうか？
俺に何を着ろと？

『シリウス様が今度の舞踏会に行くときに一緒に行ってもらいたいのです。』

『ちょっと待ってください。俺に何を着ろと？』

『ドレスです。リボンとフリルがたっぷりの。』

聞き間違いではないらしい。

『ちょっと待ってください！！　何故俺が女物の服を着なければならないのですか！？　』

舞踏会ということは、当然ダンスがあるはずだ。
ドレスを着た自分とシリウスが一緒に行くということは、ダンスも一緒に踊るということだろうか。

……気持ち悪い。

『俺は男ですよ？』

青白くなった顔でアレンがいう。

『…なにか勘違いなさっていませんか？　シリウス様にも女性の格好をしてもらいますよ？』

さらりと信じられないことをアリアは言った。

あの、無駄にプライドの高いシリウスが女装？

想像出来ない。おそらく、シリウスは何らかの理由でアリアに女装するよう頼まれたらしい。女装するのが嫌なシリウスは、アリアに提案したのだろう。「アレンが女装するといったら俺もしてやる。」とかいって。

読み間違えたな、シリウス。

普段、お前には痛い目にあわされている。少しは反省させてみようか。

『…アリアさん、その話、もう少し詳しく聞かせてくれませんか？』

いつの間にか、外は日が暮れていた。

『では、了承ということですね？』

『受けましょう。　…しかし、本当にバレないんですよね？』

『大丈夫です。　仮に気づかれても、エーデル公爵家の力で揉み消します。』

少し不安になった。

『…よろしく頼みます。』

『こちらこそ。』

こうして、アレンとアリアの交渉が終わった。

（何故お前は断らなかったんだ…。）

（いや、俺ってシリウスにはさんざん振り回されてる気がするからさ？）

にっこりと微笑むアレン。

（…つまり、俺への報復か…。）

がっくりと肩を落とすシリウス。

こうして、シリウス達の、ノーフォーク邸への潜入調査が始まった。

第12話　ノーフォーク邸　2

（……ノーフォーク伯爵が来ましたよ。）
（……やっとご登場か…。）
（遅すぎるよ…。）

ノーフォーク邸に着てかれこれ1時間が過ぎていた。　自分とアレンは今はレーラの付き添いということだからよいのだが、レーラはエーデル公爵の名代ということで来ている。身分が上であるレーラをこれほど待たせるとは、失礼きわまりない。

『お待たせしてしまい、大変失礼しました。始めまして、レーラ様。私は「ウィリアム・ノーフォーク」。以後、お見知りおきを。』

ウィリアム・ノーフォークという人は、初老の男だった。　歳は40～50位だろうか。　金髪に碧眼で、落ち着いた雰囲気をはなっていた。

『いいえ、ノーフォーク様。　気にしていませんから。　始めまして。「レーラ・エーデル」と申します。　こちらは親戚のカレン姉様、そして友人のアリスですわ。』

レーラがにっこりと笑い、シリウスとアレンを伯爵に紹介した。

『始めまして、伯爵様。レーラの従姉のカレン・アリウムと申します。』

『ほう…。レーラ様とよくにていらっしゃる。初めてお目にかかりますが、　失礼ですが、今日はどちらから？』

『アクアパレスから来ましたわ。　レーラとは、遠縁の親戚で、母方の実家が同じ家なんですの。』

シリウスはカレンを見事に演じきった。
魅力的な笑顔を伯爵に振り撒いた。

『なるほど、アクアパレスから…。　』

伯爵が納得したように頷いた。

この国の町は、交流が乏しい。５大都市は特にそれが厳しい。普通はよほど身分の高い者以外は自分の住む町の外へは自由に出られない。

『ええ。』

優雅に微笑むシリウス。
用心深い伯爵もまさかこの少女が男だとは思いもよらないだろう。

『貴女のお名前も、お聞きしても良いでしょうか？』

伯爵が丁寧にアレンへ質問する。

『アリス・ウォルスキーと申します。　カレンとは友人で、私もアクアパレスから来ましたわ。』

アレンもにこやかに微笑む。　シリウスを困らせるために引き受けたが、ここで自分達の正体がバレるのは痛すぎる。

『そうでしたか。始めまして、アリス嬢。』

伯爵も笑顔を返した。

しかし、シリウスは一瞬だけ怪訝そうな顔をした伯爵の変化を見逃さなかった。エーデル公爵家が、アクアパレスの家（下位貴族）と親しくしているということが、怪しく思えているのだろう。

（一応、レーラの親戚だと言うし、無下に扱うことも出来ない――といった所か。　これは後でフォローしておく必要があるな。）

『では、レーラ様もお二人も、宴を楽しんでいってください。　今日は夜も遅くなると思うので、是非とも我が屋敷に泊まっていってくだされ。　部屋はメイドに用意させましょう。』

『いえ、そこまでしていただいては…。』

『かまいませんよ。　うちの娘たちもお三方とお話出来ると喜びます。』

『光栄ですわ。　それでは…お言葉に甘えまして…。』

『ええ。　それでは、後ほど宴でお会いしましょう。』

『ええ。では後ほど。』

それぞれが様々な思いを秘めた、ノーフォーク伯爵との最初の会談が終わった。

『ほら、伯爵も気づかなかったでしょう？』

この部屋は自分達にあてがわれた部屋だ。
豪奢な装飾が施されたこの部屋には、シリウスの妨害の魔法がかけられており、外からの盗聴は不可能となっていた。

『男だとは気づかれはしなかったが、向こうは俺達のことを怪しんでいるようだったな。ここは１つ、あの伯爵に媚でも売っておくかな。』

『さすが、シリウスは余裕だね…。俺は気づかれないかずっとハラハラしてたのに。』

『今さら、しかもお前がそれを言うのか。　俺にこんな格好をさせたのはお前だ。　お前は自分で女役を演じると決めたんだろう？』

若干、呆れたようにシリウスが言う。

『そうだけどさ…。　多分、あの時の俺はどっか壊れてたんだ。いまあの時の自分に会えるなら、ぶん殴ってでも止めてると思うんだ。』

『……本当に今さらだな。』

『……うん。ゴメン、シリウス。』

『…いや、気にするな。俺もお前にストレスをかけすぎるのは駄目だと学習したしな。以後は気を付けよう。』

2人は虚ろな顔で慰めあう。

『お2人ともいつまでもそんなことを言ってないで、伯爵が私達のことを疑っているというなら、その疑いをとく、策を考えましょう。』

ばっさりと笑顔で切り捨てるレーラ。

『『……わかった。』』

2人とも、正論なので、言い返せなかった。

こうしてノーフォーク伯爵への対応を考える為の会議が始まった。

……若干シリウスとアレンが落ち込んでいるのはしょうがなかったが。

第13話　キーラとメアリ

『ようこそ、いらっしゃいましたわ。　レーラ様。　それにカレン様、アリス様も。』

にこやかに迎えてくれたのはノーフォーク伯爵の娘、キーラとその妹、メアリだった。

『レーラ様はシルバーパレスから、カレン様とアリス様はアクアパレスからいらしたのでしょう？　是非、お三方の町の様子を聞かせてほしいのです。』

キーラとメアリはキラキラした目をむけた。
他の町の様子など滅多に聞けるものではない。

『ええ、シルバーパレスはとても美しい町ですのよ。朝日が登る時、町が白銀に輝き、何度みても飽きませんの。　それから神殿は…。』

レーラが町の説明を始める。
やはり、女の子同士、よく話が弾むようだった。

『カレン様、アリス様、アクアパレスはどうなんですか？』

レーラの説明が終わり、話が自分達に向いたようだ。
幸い、シリウスは一度だけアクアパレスに行ったことがある。
アレンも自分の付き添いということで一緒に行ったのだ。　説明す

るのは容易なことだった。

…もっとも、アクアパレス出身という設定はその経験があったために決めたのだが。

『はい。　アクアパレスは貿易が盛んで…。』

伯爵が敵と繋がっているという話が事実なら、この子達はそれを知っているのだろうか…。

そんなことを思いながら、シリウスは説明を始めた。

登場人物紹介　2？（前書き）

一応、ノーフォーク家の3人の紹介です？
見なくても支障はないかと思いますので、興味のないかたは飛ばしても大丈夫です？

登場人物紹介　２？

ウィリアム・ノーフォーク
Ｌｅｖｅｌ２
歳　？？
家柄　ノーフォーク伯爵家

女王陛下への反逆の疑いがかかっているノーフォーク家当主。幼少の頃はシルバーパレスに住んでいたが、家が没落してしまい、ドラゴンパレスに移り住んだ。大変用心深い性格らしい。

キーラ・ノーフォーク
Ｌｅｖｅｌ３
歳　１３
家柄　ノーフォーク伯爵家
居住地　ドラゴンパレス

ノーフォーク伯爵家の長女。父と同じ金髪に碧眼の容姿をもつ。しっかり者。

メアリ・ノーフォーク
Ｌｅｖｅｌ３
歳　９
家柄　ノーフォーク伯爵家

キーラの妹。　金髪だが、父や姉とは違い、銀色の瞳を持つ。人懐っこい性格。

第１４話　町と階級

『シルバーパレスもアクアパレスもさぞかし美しい町なのでしょうね…。』

メアリがうっとりとした表情でいった。

『私とメアリは町から出たことがありませんの。』

『そうなのですか…。　ドラゴンパレスも素晴らしいですが、他の町も美しいものですよ。こんど、是非私の家にもいらしてくださいな。』

レーラがキーラとメアリを誘った。
すると、少し困ったように２人は顔を見合わせた。

『……ごめんなさい、レーラ様。　私達姉妹はＬｅｖｅｌ３なのです。シルバーパレスへの渡航は認められておりませんの。』

『ッ！　…申し訳ありません…。』
レーラが謝罪した。
この国で階級を聞くことは非常に失礼な行為だ。身分や階級に応じて、様々なことが縛られてしまうので、階級を隠したいと思う者は沢山いるからだ。勿論、気にしない者もいるだろうが、それは少数派にすぎない。

『お気になさらず。　……そろそろ舞踏会の準備をしなければなりませんね。』

微妙な空気になってしまった空間で、　キーラが言った。

『そうですね。　では、話の続きは舞踏会の後ででもしましょうか。
今日は泊まらせていただくので。』

シリウスが明るく言った。

『はい、カレン様、アリス様、レーラ様、また後ほどお願いしますね。　宴の席でお会いしましょう。』

『…ごめんなさい、兄様。相手の階級をきくつもりはなかったのですが…。』

『わかってる、レーラ。　だが、もう少し注意した方が良いぞ。
俺達は遊びに来たわけではないんだから。』

『まあ、シリウス。　そんなにレーラを責めるなよ。』

アレンがレーラをかばった。

『これから注意していけば良いんだし。　それに俺も少し警戒が甘かったから。』

笑いながらいう。
おそらく、自分とレーラの気持ちを軽くしたいのだろう。　普段はおおざっぱな癖にこいつは妙なところで優しいというかお節介なのだ。
もっとも、そういうアレンだからこそ、シリウスが親友と認められるのだが。

『まあ、お前ももう少し上手くしゃべってくれたら俺も楽だったんだがな。』

シリウスも笑いながら言った。
アレンは最初に自己紹介した後は殆どしゃべらず、相づちばかりうっていたのだ。

『俺よりも、お前の方が演技は得意だろう？』

『いつかもいったが…面倒だからといって全部俺に押し付けるな…。』

『努力するよ。』

全く反省していない様子のアレン。

『兄様、　私も今後は気を引き締めてまいります。』

『ああ。だがあまり無理はするなよ？　多少のことなら俺が誤魔化せるから。』

シリウスがレーラの髪に指を差しこむ。レーラが嬉しそうに微笑む。

『アレンも少しはレーラを見習え。』

『レーラは真面目過ぎるよ。　シリウスに任せれば大抵の事はなんとかなるよ？』

『それもそうですね……。』

『アレンッ！！　レーラにそんな事を教えるなッ！』

『レーラも納得してくれたよ。』

『……レーラ、アレンの言うことをまともに受け取るんじゃないぞ？』

『嫌ですわ、兄様。冗談ですよ？』

『そうだよ、シリウス。いくら俺でも全部人任せにはしないよ。心外だな。』

アレンがにっこりと笑った。

『…冗談には聞こえなかったぞ？』

『冗談だよ、６割くらい。』

『つまり、残りの４割は俺任せというわけか…。』

疲れたようにシリウスが言う。

この屋敷での調査は思っていたよりずっと大変な事になりそうだ――

――とシリウスは人知れず思った。

第１５話　舞踏会、開幕

舞踏会には沢山の人が集まった。

『うわー。あの人ってシルバーパレスの貴族だよね？』

『ああ…。ラッシュ子爵だ。伯爵は他の町の人間をかなり招待したようだな…。』

『というか、シリウス。レーラは踊りに行っちゃったけど良いの？』

諜報活動が目的なのにのんきにダンスをしていて良いのか――――ということだろう。

『伯爵に近づくのは俺達の役目だ。レーラは父の名代だからな。レーラ自身が動くのは得策じゃない。』

なるほど、と納得したようにアレンが頷いた。

エーデル公爵家がノーフォーク伯爵家の反逆の有無を調べようとしているなど、絶対に悟らせてはならない。

『ただ、伯爵は俺達…特に俺を疑っているようだからな。黒髪黒目はレーラと同じで、エーデル家の親戚――と、我ながらなかなか酷い設定にしたものだ。』

設定が雑過ぎる。　まあ、１夜限りなので良いが、何日もかかるような仕事なら、絶対にボロがでる。

『じゃあ、伯爵に近づくのは俺ってこと？』

心底嫌そうにアレンが言う。

『馬鹿を言うな。お前1人で行かせるわけないだろう。俺も一緒にいく。』

『は？』

『俺を伯爵が疑うのは黒髪黒目のせいだろう？　だから、目の色を変えれば良い。』

『…シリウス、変化の魔法が使えたの？』

唖然としたようにアレンが言う。

人の身体を変化させる魔法はとても高度なのだ。

『全部は無理だが、瞳の色くらいならな。　というか、容姿を全て変えられるなら最初からやっている。』

そこで、シリウスが小さな声で呪文をとなえた。

すると漆黒の目が紫に変化した。

『さすがだな。　…でも、さっきは黒目で今は紫っておかしいぞ。
　そこはどうするんだよ？』

『そこで、記憶改変の魔法を使う。重要な記憶なら変えるのは難しいが、瞳の色程度なら問題ない。』

『なるほど。　…あっ、伯爵が出てきたぞ。』

『ふん…。　いくぞ、アレン。』

不敵な笑みを浮かべるシリウス。

『了解。』

珍しく真面目な声音でアレンがいった。

伯爵との2度目の対面が始まろうとしていた。

第１６話　ダンスと策略

『伯爵様。』

シリウスが美しい笑顔を浮かべながら、ノーフォーク伯爵に声をかけた。

『おお、　これはカレン嬢、　それに、アリス嬢も。』

伯爵がシリウスを見た瞬間、シリウスは小声で呪文をとなえた。伯爵は１瞬だけ、驚きの表情になり、また元の笑顔に戻った。

シリウスの記憶改変の魔法が効いたのだろう。

『どうですかな？　宴は楽しんで頂けていますか？』

『ええ、お陰さまで。』

シリウスがにっこりと笑った。

『それは良かった。』

『伯爵様は踊らないのですか？』

『私は見ているだけでいいのですよ。』

『いけませんわ、伯爵様。せっかくのパーティーなのですから。さあ、まいりましょう！』

シリウスがやや強引に伯爵の手をとって踊りに行った。伯爵も苦笑しながらついていく。

『…あいつもよくやるよ…。
（俺は男と踊るなんてごめんだ…。）』

いいながら、内心でそんなことをアレンは思っていた。

何はともあれ、伯爵の警戒を少しは緩めることが出来たのではないだろうか。

『どうだった？　伯爵と踊ってみての感想は。』

素晴らしい笑顔でアレンが聞いた。

『…お前、楽しんでいただろう。』

『うん、凄くね。まさか、シリウスが伯爵と踊るなんて思ってもいなかったよ。』

『……。』

何もいわないシリウス。
これは思った以上にダメージが大きかったらしい。

『…まあ、これでいくらかは警戒を緩めてくれるだろう。』

そこで、シリウスが表情を一変させた。
『…アレンッ！！レーラは何処だ！？』
『えっ…。　レーラなら踊ってるんじゃ…。』
そこで、アレンも気づいた。
さっきまでダンスフロアで踊っていたレーラの姿が何処にもない。
シリウスとアレンが必死で会場内を探す。
そして…
レーラはいつのまにか、ダンスフロアに戻っていた。
『兄様、アレン。どうしたのですか？』
『レーラ、急にフロアからいなくなるな！！』
『…えっ？』
不思議そうにレーラが聞き返した。
『どうしたの？レーラ。』
『あの…。アレン、兄様、私はフロアから出てはおりませんよ？』
『だが、さっきはたしかにフロアにいなかったが……やられたッ！！』
急にシリウスが叫んだ。
怒りの表情を浮かべて。

『どうしたの？シリウス』

『あの…兄様？どうかなさったんですか？』

『アレン、レーラ。俺達は伯爵に出し抜かれた。』

『『えっ？』』

『伯爵を見失ったッ！！』

第17話　闇の契約

『…エーデルからの来客が来たぞ。』

無造作な声音で金髪、碧眼の初老の男がいう。

『へえ…。　エーデルからは誰が来たのかしら？』

その言葉に応えたのは赤く長い髪に緑の目をした女。　いや、こちらはまだ「少女」と呼んだ方が相応しいかもしれない。

『レーラ・エーデルだ。　それとその親戚1人とその友人1人だ。』

どうでも良さそうに男が答える。

『大事なお姫様を寄越したの！　あははっ！！』

少女が心底可笑しそうに笑った。

『何が可笑しいのかは知らんが…。　俺が渡す情報はここまでだ。あとは自分達で調べるんだな。それと、お前達の主に契約を忘れるなと伝えておけ。』

顔をしかめて男―――ウィリアム・ノーフォークがいった。

伯爵はその言葉を最後に闇に消えた。

後に残された少女はというとまだ笑っていた。
そして笑いやんだ後、ひっそりと呟いた。

『「彼」はこないだろうとは思ってたけど、まさかお姫様を寄越すとはね…。　「彼」やエーデルがどう動くか見ものね…。』

少女は、無邪気な笑顔だったのが一変して、凄みのある微少を浮かべた。

『もうすぐ会えるわ、お姫様。貴女も「あの人」もシエラ様の敵は全てこの私が倒してみせましょう…。』

少女はもう一度静かに、そして悲しげに笑い、　姿を消した。

第１８話　嵐の前の静けさ

『何処にいるんだ…。』

自分としたことが迂闊だった。
自分がノーフォークに呪文をかけられる状況だったということは、相手だって自分に呪文をかけられるということだ。
おそらく、自分とアレンは錯乱させられ、軽いパニック状態になっていたのだろう。

『…シリウス。伯爵が戻ってきたよ…。』

アレンが小さな声で教えてくれた。
たしかに、伯爵が戻ってきている。何事もなかったかのようにしているが、たしかに伯爵は会場にいなかったのだ。自分だけではなく、レーラにも伯爵の位置を魔法で探知してもらったが、探すことは出来なかったのだから。

『…アレン、伯爵は会場を抜けて、何をしていたと思う？』

『…え？　シリウスは何をしていたかわかるの？』

『あくまでも推測だがな…。　わざわざ、会場を抜け出してまでする用事だからな。　伯爵があの敵の仲間だとしたら…。　敵をこの会場に呼び寄せる密会でもしていた…とか。』

『えっ！　』

『…そんなに真に受けるな、アレン。あくまで推測なんだから。』

シリウスが軽く笑った。

『驚かせるな…。』

少し怒りながら、アレンが言う。
そこで、シリウスも真剣な表情になった。

『アレン、それでも警戒は必要だ。油断はするなよ。』

『シリウス、これからどうするんだ？』

『そうだな…。　少し、積極的に探ってみるか…。　お前は、他の客から役にたちそうな情報を探ってみてくれ。』

『了解。　お前も無茶はするなよ。』

『ああ、お前もな。』

『レーラ。』

『兄様ッ！　……伯爵が戻りましたが…どうなさるのですか？』

レーラは声をひそめて言った。

『アレンには他の客から情報を集めるように頼んだ。　レーラ、お前もアレンと一緒にいくんだ。　伯爵が敵と繋がっているなら、お前を狙ってくる可能性が高い。』

『わかりました…。　兄様はどうなさるのですか？』

『俺はもう一度伯爵をさぐってみよう。』

『…お気をつけてください。』

『ああ。』

向かいの方で笑顔で誰かと話している伯爵。
さっきまでは非常に紳士的で優しげな印象だった。
しかし、同じように笑っているようなのに、シリウスにはそれがとてつもなく不気味に見えた。

第１９話　伯爵の思い

『伯爵様。』

カレンという少女が微笑みながら近づいてくる。エーデルの娘によく似た娘。おそらく、この娘もエーデルからの客なのだろう。

青のドレスに艶やかな黒髪。　真っ白でなめらかな肌。　彫刻の様に、否、それ以上に整った顔立ち。

そして――

さっきまでは漆黒だった瞳が紫にかわっていた。

それに気づいた瞬間、急激な睡魔が襲った。

自分の記憶を書き換えようとしている――――！

記憶改変の術はこの様な幼い少女が使えるような代物ではない。

おそらく、自分がこの少女を警戒していると気づいたのだろう。

しかし、自分もれっきとした魔法使いである。

必死で相手の呪文に対抗する。

相手は自分が呪文にかかったと思ったのだろう。

魔力を弱めた。

短い時間だったはずだが、この上なく長く感じられた。なんとか呪文は破ったが、もう一度かけられて抵抗する魔力と胆力はないだろう。
久しぶりに肝を冷やした。
そして、この少女には絶対に自分が呪文を破ったことを知られてはならない――――。

『どうですかな。宴は楽しんで頂けていますか？』
何事もなかったように答える。
この少女がエーデルに深い関係を持つ者だということはほぼ間違いないだろう。
『ええ、　お陰さまで。』
魅力的な微笑を浮かべる少女。　女神の様に見えるその笑顔の裏は何を考えているのだろうか。
『それは良かった。』
私と「あの者」との関係を調べに来たのだろうが。

『伯爵様は踊らないのですか？』

この程度で負ける私ではないと思いしってもらおうか。

『私は見ているだけで良いのですよ。　』

少女よりもさらに深く、微笑んで見せる。

『いけませんわ、伯爵様。せっかくのパーティーですから。さあ、まいりましょう！！』

私はもう負けるわけにはいかないから。

我が願いを叶えるために。

そのためならば…

このドラゴンパレスでさえ、滅ぼしてみせよう。

番外編　これからも

『アレン、「人間の使う魔法には１０の属性が存在する。　その属性を全て答えよ」。』

『えっと……光、闇…、炎……、水？』

『…光、闇、炎、水、樹、地、氷、雷、風、無だ。次は「各属性の高位精霊を一体ずつ答えよ」。』

『えーと…。　光と闇はたしかフェニックス…？。炎はサラマンダ…？』

『なぜお前は疑問形で答えるんだ。それと、サラマンダは下位精霊だ。』

ため息をつくシリウス。

『いや、だって今日しか勉強してないし…。』

『だからなぜ今頃から勉強を始めるんだ。』

『えっと…。　気が向いたから？』

はっきりと目をそらすアレン。

『アレン…。　受験日まであと何日だか知ってるか？』

『…１週間くらい？』

おそるおそるいうアレン。

そこでシリウスの怒りが爆発した。

『そうだ！！1週間だッ！！基礎中の基礎の問題も答えられないなんて…ッ。　お前は馬鹿か！？この3年間、何をしていたんだ！？』

名目、私立シュヴェルツェ初等学校最終学年に所属しているシリウスとアレン。
アビリティ国立第1学校の受験日はすでに1週間後に迫っていた。

『うっ…。　』

『いいか？　アレン、受験勉強とは長い時間をかけてやるものだ！
たった1週間で大丈夫だとでも思っていたのか！？ましてや、俺たちが受験するのは、仮にもこの国で最難関の学校だぞ！？』

『…返す言葉もありません…。』

膝をつき、がっくりとうなだれるアレン。

『……アレン。』

しばらく無表情で黙っていたシリウスが唐突に言った。

『…なんでしょうか、シリウス様？』

『これから1時間でこの本を暗記しろ。』

そういって、　アレンの目の前に落とされたのは2冊の本。

…どちらもとても分厚く、軽く千ページ位はあるだろう。

『ちょっと待って！？　これを1時間で？無理だよ。せめて1日でしょう！？1時間じゃ読み終わりもしな…。』

突然、シリウスが攻撃魔法を放った。

…アレンに向けて。

『ッ！！　シールドッ！！』

間一髪でシリウスの呪文を防ぐアレン。

『いきなり何をするんだよ！？』

にっこり笑うシリウス。

…その目は少しも笑っていなかったが。

『何って…？俺が聞きたいね。お前はあと1週間しかないのにそんな贅沢をいうのか？　俺の魔法の1つや2つくらう覚悟があっての言葉だよな？』

『……すいません。1時間で覚えます……。』

『わかれば良いんだ。』

『シリウス、　さすがに眠いよ…。』

昼間、シリウスが来てからすでに１４時間が経過していた。食事と風呂の時間以外はぶっ続けで勉強していたのである。

『…そうだな。そろそろ今日は終わるか…。体を崩しても困るし…。睡眠は７時間で良いか？』

シリウスは意外にもあっさりと了承してくれた。それも７時間も睡眠時間をくれるというのである。

『えっ！　本当に良いの？』

『ああ、俺もそろそろ眠かったしな。　別室を借りるぞ、アレン。』

シリウスはさっさと部屋を出ていってしまった。
その姿に少々違和感を覚えたが、そんな不可解な気持ちはすぐに吹き飛んでしまった。
やっと寝られるのである。
シリウスに感謝するアレン。

どう考えても受験に落ちそうな自分を助けてくれているシリウス。
なんだかんだで良い奴だと思う。
…たまに死にそうな目にあわされるが、今日は忘れておこう。

7時間後、そんな気持ちがすっかりと失われてしまうことを知らず、
嬉しそうに眠りにつくアレンだった。

『シリウス！！どういうことだよ！？』

『どうかしたのか？アレン。』

涼しげな顔で言うシリウス。
何度こいつに騙されたことか……！

『なんで眠っているときに頭の中で声が聞こえるんだよ！？』

つまり、こういうことである。

シリウスはアレンが眠って程なくして、アレンの部屋に戻ってきた。
…アレンに呪文をかけるために。
アレンの夢を変化させる魔法を。

本の情報を全て魔法でアレンの夢に叩き込んだ。
おかげでアレンは眠っている間中、本の内容を暗記させられていたのである。

これでは起きている時と変わらない。

『お前が眠いと言ったから眠らせてやったんだ。それに、この魔法は効率が良い。…魔力の消費と難しさを別にすればだが…。』

わざとらしくため息をつくシリウス。

眠っている時間は7時間程度なのに、夢の中ではすでに3日が過ぎていた。

…3日間寝ないで勉強していたわけである。

『…お前、俺を殺す気か？正直、もう疲れたぞ…。』

『大丈夫だ。　この魔法はあくまでも「夢」に干渉する魔力だからな。身体の疲れはとれているはずだ。』

優しく微笑むシリウス。
今はその綺麗な笑顔が悪魔に見える。

『じゃあ、もう一度寝ろ、アレン。家から要点をまとめたノートを

持ってこさせた。』

シリウスの前の机にはノートが２０冊位のノートが置かれていた。

『嫌だッ！！』

必死で拒絶するアレン。

これだけの量を勉強するのはどう考えても１週間以上かかるだろう。つまり、夢の中とはいえ、１週間も勉強し続けなければならないということだ。…夢の中なのだから、当然、食事や休憩の時間はないだろう。

『黙れ。』

シリウスが軽く手を振ると、途端に急激な睡魔が襲った。

アレンはたちまち、深い眠りに落ちた。

アレンが目を覚ましたのは受験日の前日。

『アレン、「各属性の高位精霊を答えよ」』

『…光と闇はフェニックス、炎はファイアリィ、水はウォーティ、樹はウッディ、地はガイア、氷はグラキエス、雷はグローム、無はリアンなど。』

『よし、正解だ。次は…、「魔法の行使のための条件を説明せよ」。』

『…まず第1に各属性に対する適正と、精霊を使役するための魔力をもち――――。』

すらすらと、　だが虚ろな目をして答えるアレン。

『――――よし、これだけできればなんとか大丈夫だろう。』

『…本当か？』

『ああ、もう休んで良いぞ、アレン。』

『そうか…。　なあ、シリウス。』

『なんだ。』

『…お前は酷すぎる…。』

『普段から勉強しないお前が悪い。』

呆れたように笑うシリウス。

『そもそも、お前は…。』

言葉を続けようとした所で気づく。
アレンがすでに眠っていることに。

『さすがにこいつも疲れた――か。』

夢で限界まで時間を延ばしての勉強である。身体に疲労はないが、
精神力はかなり疲れているはずである。

『まったく…。』

正直、こいつの計画性の無さには呆れ果てる。
だが…

『次はもう少し計画的にな…。』

こいつには決めた事を絶対にやり遂げるだけの精神力がある。
…だからこそこいつは俺の呪文に抵抗しなかったのだろう。

シリウスはアレンに呪文をかけるとき、魔力を極力抑えた。
やる気がないのなら、簡単に破ることができるように。『まったく、
明日は頑張れよ？』

シリウスは邪気のない笑みを浮かべる。

そして、ラインフォード邸を後にした。

『シリウスッ！レーラッ！』

アビリティ国立第1学校の受験者に合否の手紙が届いた日。

これ以上ないほどの笑顔を浮かべたアレンがエーデル邸を訪ねてきた。

『その様子だと受かったようだな？』

からかう様に言うシリウス。

『ああ！』

得意げに言うアレン。　受かったことが余程嬉しいのだろう。

『おめでとうございます、アレン！！』

レーラが嬉しそうに微笑む。

『ありがとう、レーラ。そういうシリウスこそどうだったんだ？』

シリウスは不敵に笑って、銀色の何かを自分に投げた。

手にしたものを見てみると、学校の校章の入ったバッチであった。

『悪いが、俺が落ちるなんてあり得ないな。』

嘲るように言うシリウス。

『どうやら、俺が学年主席らしいな。』

紛れもない、本物のバッチであった。

『流石だな…。』

第１校の受験者は毎年一万人を越える。その中でシリウスは上位５００人にはいり、その頂点に立って見せたのである。

『兄様ですもの。』

レーラが得意げに言う。

『ははっ！そうだったな！　まあ、来年もよろしくな！』

アレンは大きな声で心底愉快そうに笑った。

『ああッ！！』

シリウスと腕をぶつけ合う。

出会った当初は男爵家の長男に過ぎない自分が公爵家の時期当主と長い付き合いになるなんて思ってもいなかったが。

この友人とはどうやら長い付き合いになるようだ――――とアレンは思った。

第２０話　美しい音色

シリウスは伯爵を監視していた。
気づかれないように気配を殺して。
今の所、　伯爵は特に怪しい動きはない。

ダンスフロアからは少し離れた場所で伯爵は知らないご婦人と話し込んでいた。

話の内容は気になるが、近づき過ぎると気づかれるおそれがあり、かといって、魔法で盗聴でもしたら、気づかれたときの言い訳すらできない。

（兄様…。　聞こえますか？）

（シリウス？）

レーラとアレンがテレパシーの魔法で話しかけてきた。

（ああ。　だが、今の所、　特に何もないな。）

（そうですか…。　）

（シリウス、それよりもうすぐ宴が終わってしまう。邸の中を調査するのは今が絶好の好機じゃないか？）

（駄目だ。今、会場を抜け出してみろ。絶対に怪しまれる。邸を調べるのは今夜だ。）

レーラとアレンにそう伝えた所で、伯爵に動きがあった。
ご婦人との会話が終わったらしい。
笑顔で手を振りながらご婦人を見送る伯爵。
そして、伯爵は自分の方に近づいてきた。

（…ッ！　伯爵がこっちに来た。後でまた連絡する！）

シリウスはそういってテレパシーを断ち切った。

（兄様ッ！）

レーラはシリウスに語りかけたが、テレパシーが切られたのを感じて諦める。

『アレン…。　兄様は大丈夫でしょうか…？』

心配そうに言うレーラ。

『大丈夫だよ。シリウスがこういうことでヘマをするわけないし。』

楽観的な口調で無責任にアレンが言う。しかし、そこでアレンも少しだけ真面目な表情で諭すように言う。

『それに、心配するより、俺達は少しでも多くの情報を集めた方がシリウスも喜ぶと思うよ？』

正論なのでレーラも言い返せない。

伯爵について、自分達はあまり多くのことを知らない。
書類上のことなら、この邸に来る前に調べたが、書類ではわからないこともとても多いのだから。

『…わかりました。』

不承不承といった風にレーラが頷いた。

『まずは、伯爵の娘のキーラ嬢とメアリ嬢に話を聞いてみよう。』

アレンが苦笑しながら言った。

『カレン嬢！　またお会いしましたな！』

シリウスに気づいた伯爵が笑みを浮かべながら近づいてきた。

『ええ、伯爵様。』

『それより、踊られないのですかな？　』

伯爵がいたずらっぽく言う。さっき少々強引に誘ったことを揶揄しているのだろう。

『ええ…。少々気分が悪くて…。　人酔いしてしまったみたいですわ…。』

綺麗な顔に少々疲れた様な表情を浮かべるシリウス。

『それはいけないな…。では、もう部屋に案内させましょうか？宴もそろそろ終盤ですし…。』

心配そうな声音でいう伯爵。

しかし、その目は人を気遣う者の目をしていない。

何か他のことを考えている目だ。

たいしたものだ―――とシリウスは思う。

おそらく、自分でなければ、伯爵のこの演技にすっかり騙されていたのだろう。

しかし、自分は違う。
幼き頃からエーデルの時期当主として育ったシリウスである。
人の演技など見慣れている。それがどんなに巧い仮面でも、　それを見破れるだけの力がある。

『…大丈夫ですわ。もう少しですし、レーラやアリスに迷惑をかける訳にはいきません。』

弱々しく微笑んでみせるシリウス。
その微笑みはまるで聖女の様に透き通った綺麗な笑みだった。

（伯爵、流石の貴方にもこんな真似は出来ないでしょう？）

本心を隠した会話とはなんと愉快なことか。

『そうですか…。――――ああ、最後の曲が始まったようです。』

美しい音色が響き渡る。

『美しい音色ですね…。　聴いたことのない曲ですが……。』

首を傾げるシリウス。

『聴いたことがないのは当然でしょうね…。　これは私の作った曲ですから。』

伯爵が苦笑とともに言う。

『まあ！伯爵は楽譜をかくことができるのですか？』

貴族のたしなみとして、歌を歌うことのできる者は数多く存在するが、楽譜をかくことのできる者はごく僅かしかいない。

『ええ。まあ。』

『何と言う曲なのですか？』

キラキラした目で無邪気にきくシリウス。

『曲名は――。』

『旦那様ッ！！』

伯爵が答えようとしたその時、　伯爵家の執事のような人が慌てて駆け込んできた。

第２１話　破壊

『旦那様ッ！！』

『…どうした。そんなにあわてて。』

伯爵が少し不機嫌そうに答える。

無理もない。例え何か問題が起こったとしても、会場にいる客には悟らせてはならないのだから。

『ッ失礼しました！　……。』

『……。』

執事の話を聞いている内に、伯爵の表情がどんどん険しくなっていく。

『どうかされましたか？』

シリウスは控えめにたずねた。

『……。失礼、カレン嬢。―――。』

伯爵は答えず、一瞬何かを呟いた。

そして次の瞬間会場いっぱいに伯爵の声が響いた。

『皆様、先ほど、このドラゴンパレスにテロリスト達が侵入した模様です。テロリスト達は赤い生地に黒い鳥が描かれたマントを着ているとのこと。現在、テロリスト達は町の中心部に位置する神殿を襲撃している模様で――――。』

（レーラッ！アレンッ！）

伯爵の言葉を聞いた瞬間、シリウスはレーラとアレンにテレパシーを送った。

（兄様、聞こえていますッ！）

（俺も大丈夫だ。それより、これからどうするんだ？神殿にいくのか？）

（いや、神殿にはいかない。）

（どうしてですか？）

レーラが意外そうに聞き返した。

（神殿が襲われたという情報を伯爵が俺達に隠さなかったということは、事態がそれだけ深刻だということだ。そして、ノーフォーク伯爵家はこの町では有力貴族だろう。）

（つまり…。）

（ああ、神殿が伯爵に応援を頼むことは十分に考えられる。それに、

伯爵はどちらにせよ、神殿にいかなければならないだろう？）

（そうか！！　神殿からの応援がなくても、伯爵と敵が繋がっているのなら…。）

（敵方の応援に行かなければならない――――ということですね。）

（ああ。それに伯爵が神殿に行かなくても、この状況は俺達にとってもチャンスだ。このパニックで、邸の警備は薄くなるだろう。）

（では……。　）

（レーラ、アレン。合流しだい、ノーフォーク家内を調査する。）

ドラゴンパレスの神殿は普段なら、美しく輝いている。宝石や魔法石が煌めき、そして神殿の中には巨大な女神像がある。
その女神像は周辺の宝石の光を反射し、　幻想的な青に輝く。

しかし、今日は違った。いつもは青く輝いているはずの女神像は、
　真っ赤に輝いていた。

神殿の外では白いローブの者達と深紅のマントの者達が激しい呪文の応酬をしていた。
いや、呪文だけではなく、魔獣や精霊を召喚している者達もいた。

真っ白なローブの者達はこの神殿の神官達だろう。
５大都市の神殿で働く神官達は全員が優秀な魔法使いだ。
シルバーパレスとドラゴンパレス以外の町では神殿以外で魔法使いがいないため、とても貴重な存在でもある。
そして、彼らは町を守る最も強固な盾でもあった。

彼らが一斉に呪文を唱える。

『ライトニングッ！！』

青白い電撃が一斉に赤いマントの集団に襲いかかる。

しかし、その攻撃は容易く打ち消された。
１人の少年の手によって。

赤いマントを羽織ったその少年は銀の髪に漆黒の目をしていた。

少年が軽く手をふると、電撃が打ち消されてしまった。

神殿の魔法使い達は一気に真っ青になる。
彼らは魔法使いの中でもエリートである。
そんな精鋭である彼らの魔法が少年にはまったく通用しなかった。

いつしか攻撃がやんでいた。
いくら攻撃してもこの少年に阻まれてしまうのだ。
呆然と立ち尽くす神官達に突然、少年が呟く様に語りかけた。

『……僕は人殺しが好きな訳じゃありません…。僕達はこの神殿の女神像さえ破壊できれば良いんです…。ですから…引いてもらえませんか…？』

少年のその言葉を聞き、神官達は怒りに燃えた。
自分達は選ばれた魔法使いであるという優越感ゆえか。年端もいかないこの少年が自分達に向かって傲慢ともいえる発言をしたのが許せなかった。

『…逆賊の分際で……！！我らを甘く見ないでもらおうかッ！　ライトニング・インベルッ！』

天空から雷撃が降り注ぐ。雷属性の上級呪文。使える人間はごく僅かしか存在しないだろう。

呪文を放った神官が哄笑する。
敵方を見れば、煙に包まれており、その周辺の大地は痛々しく抉れていた。

それを見て、他の神官達にも徐々に笑顔を取り戻し初めた。

『ふん…。女王陛下に反逆する愚か者どもが…。』
嘲るように笑う神官達。
しかし、突然その笑顔が凍りついた。

少年を初めとする、赤いマントの者達は、全員、無傷で立っていたからだ。

『…引く気はないということですね…。仕方ありません。』
少年が手を神官達の方へ向けた。
『ごめんなさい…。我が敵を貫け…ファイアー・ランスッ！』
巨大な灼熱の炎の槍が神官達を一斉に貫いた。

『あった…。』
呟いたのは赤いマントを羽織った赤い髪に緑の髪をした少女。
『…ちょっと待ってください…。』

後ろから走ってきたのは先ほど神官達を殺した少年。

『あら、来たの。ラスト。』

『…ミラさんに任せたら危なっかしいじゃないですか…。』

ラストと呼ばれた少年は苦笑しながら答えた。

『心外ね！　…まあ、貴方が来てくれて助かったのは事実だけど。』

不承不承といった風にミラはいった。

『…それよりミラさん。これがそうですか？』

ラストが見上げたのは巨大な女神像。

『…ええ。これには私たちが封印するのを阻む魔法石が埋め込まれているわ。』

『…これがあと４つもあるんですか…。』

疲れたように呟くラスト。

『ふふっ。大丈夫よ。私達なら。』

ミラは軽く笑った。

『さあ、まずは１つ目――ね。』

『はあ…。それでは、破壊しますね…。ファイア・ランス！！』

炎の槍は赤く輝く女神像を貫き、粉々にしてしまった。
そして、その中心に埋め込まれていた青く輝く魔法石が姿をあらわす。

『貴方の魔法でも壊れないなんて…。』

ミラが驚いたように言った。

『…壊れなくても、この場所から持ち出せれば大丈夫です。それに、そろそろ警備隊とかがたくさんくるころだと思います…。はやく町から出ましょう…。』

『貴方がいるなら、警備隊位簡単に倒せるんじゃない？』

『……僕は人殺しは嫌いです…。』

ラストが不機嫌そうにいった。

『ああ、そうだったわね。』

『…無駄な戦いはシエラさんだって望まないと思いますよ…。』

ラストは呆れた様にミラを見た。

『シエラ「様」よ！「さん」なんて呼んだらダメよ！ラスト！』

『…どうでも良いでしょう…。……転移させますね――。』

ラストが手をふると、ミラを初めとする赤いマントの集団が一気に消失した。

破壊された神殿に残ったのはラスト1人。

『…シエラ「様」か…。』

嘲るように呟く。

自らが殺した神官達に向かって話しかける。

『…君たちには悪いことをしましたね…。個人的にはあの人が悪いとは思うんですが…。僕はあの人に逆らえませんし…。』

美しい顔を悲しげに歪ませる。

白銀に輝く髪と漆黒の目が月明かりに照らされ、輝く。

『…ごめんなさい。』

その言葉を最後に、ラストは転移した。

神殿からは生きている者がいなくなった。

第２２話　アレンの感覚

『生き残りはいないのか…？』

『はい…。旦那様…。神官達は貴族達に応援を求めにいっていた者達以外、全滅だそうです…。』

ここは、襲撃にあった神殿。
神殿を豪奢に飾っていたたくさんの装飾品は瓦礫に埋もれ、美しい顔に慈悲深い笑みを浮かべていた女神像は無残にも砕け、見る影もない。

『…神官達の死体はどうした？』

ノーフォーク伯爵が問う。

『はい。現在、シルバーパレスより上級魔法使い達が応援に来ており、傷痕を調べているとのことです…。』

魔法使いの死体を調べることはよくあることだ。
戦争などで、敵の魔法使いの力量や、使う属性など、有益となる情報を多く含んでいるからだ。

『そうか…。』

それきり、伯爵は押し黙ってしまった。

『旦那様…？』

『……神官達のことはシルバーパレスの者達が面倒を見るのだろう？　ならば我らは必要無さそうだな。…帰るぞ。』

伯爵は不機嫌そうにそう言うと、さっさと馬車の方へ歩いていってしまった。
従者があわてて後を追う。

『……そういえば、昨夜はちゃんとお客様をおもてなししたのだろうな。』

伯爵が不意に質問した。

『あっ…。はい、勿論です。』

『そうか…。喜んで貰えると嬉しいが…。』

伯爵はうっすらと微笑みながら呟く。
しかし、その目はまったく笑っていない。
見る者を怯えさせる、冷酷な光が宿っていた。

『シリウス兄様…。伯爵はやはり神殿に赴くようです。』

『そうか…。』

紅茶を飲みながらチェス盤を見つめているシリウス。
今は落ち着いたクリーム色の、しかしレースやリボンのたっぷりと付いた可愛らしいワンピースを着ている。端から見ると、美しい2人少女が優雅に紅茶を飲みながら、友人とチェスを楽しんでいるようにしか見えない。
いや、友人とチェスを楽しんでいるというのは本当だが。

『……チェックメイトだな。アレン。』

シリウスが軽く笑いながら言う。

『ははっ。お前は本当にこういうのが強いよな。』

アレンも笑いながら言った。こちらも薄い青色だが、デザイン的にはシリウスの物と同様、レースやリボンがたっぷりのワンピースを着ていた。

『兄様はチェスやカードゲームみたいな、頭脳戦が昔からお得意でしたからね…。兄様、今夜はどうなさるのですか？』

レーラが聞いてきたのは、どうやって伯爵家を調査するのかということだろう。ノーフォーク家はドラゴンパレスの家柄とはいえ、れっきとした伯爵家。それなりの使用人や私兵はいるだろう。

『そうだな…。』

シリウスはトランプをレーラとアレンに配りながら呟く。

『……レーラ、今夜、キーラとメアリのどちらかに呪文をかけることは可能か？』

『呪文ですか…？可能だと思いますが…。どのような？』

レーラがカードを受けとりながら聞き返した。

呪文を人にかけると聞いても、その目に驚きや躊躇いの光はない。

『3だ……。今晩、少しだけ体調を崩してもらう。』

『…それはちょっと可哀想じゃないか？……4。』

アレンが少し顔をしかめる。

『今夜だけだ。なにも本当に病気にするわけじゃない。』

伯爵が出かけていて警備が薄くなっているとはいえ、油断は出来ない。

邸の使用人達の注意をそらさなければならない。

『今日、色々と邸を見て回ったからな…。あの2人の部屋の位置は覚えた。』

『5…。あの、兄様…。』

『ん？　なんだ、レーラ。…6。』

シリウスがレーラに向き直る。

『呪文をかけることなら、兄様の方が確実ではありませんか？　なぜ私に？』

『あっ、それは俺も思った。…7。』

その疑問は的をえていた。攻撃呪文や防御呪文のように、基礎呪文ならばレーラもアレンもシリウスに退けをとらない。しかし、気づかれないように相手の体調を操るという魔法は比較的難しい。自分ではない「何か」を操る魔法は大体、中級呪文に属している。それならば、魔法の得意なシリウスの方が確実なのではないかと考えた2人の意見は正しい。

『ああ、その理由か…。』

『はい。どのような理由なのでしょう？　…8です。』

『9だ。　それは、俺は神殿の様子を監視しなければならないからな。こういった魔法は俺しか使えないからな…。』

たしかに、神殿に行く伯爵の監視は必要だ。しかし、ノーフォーク家の客人である自分達は今、この邸から出ることは出来ない。邸を調べる為という理由もあるが、伯爵が客人の安全の為に邸を出ないように頼んできたからだ。へたにこれを破って警戒されたらかなわない。

そういうことで、シリウスは部屋から魔法で伯爵を監視しなければならない為、レーラに頼んだという訳だ。

『なるほどね…。１０…。じゃあ、俺はここでシリウスと待機？』
追跡や透視の呪文は意識を魔法にあずけるため、傍に誰かがいないと、邸の人間が訪ねてきた時に反応出来ない。
『ああ、そうだ。だからレーラにお願いしたいんだ。頼めるか？』
『はい、勿論です。兄様。１１ですわ…。』
『ありがとう。それと…ダウトだ、レーラ。』
シリウスがにっこりと笑いながら言う。
『あっ…。残念です…。』
レーラが苦笑しながらカードをめくる。
カードは１３。
テーブルのカードを手元に引き寄せる。

どれくらいの時間がたっただろうか。
シリウスの手札はあと一枚。
続いて少ないのがレーラで最後にアレンと言う状況になっていた。
『じゃあ、そろそろ、伯爵も神殿に着いた頃だろうし…。レーラにも行って貰おうか。１３だ。』

シリウスが最後のカードを置いた。

『…ダウトだ。シリウス…。』

最後の1枚なので、アレンが仕方なく言う。

しかし、シリウスのめくったカードは紛れもないダイヤの13だった。

『残念だったな、アレン、レーラ。』

シリウスが不敵に笑う。

『相変わらずお強いですね…。』

『ああ、また最下位だ…。』

レーラとアレンが悔しそうにいった。

『2人共、次までには腕を上げておくんだな。まあ、俺は負けないが。王が弱いと下もついてこないしな。』

シリウスは傲慢ともいえる台詞を言う。

『兄様らしい言葉ですね…。』

レーラとアレンは苦笑するしかない。

『……レーラ。伯爵が神殿に着いたようだ。キーラ、もしくはメアリに呪文をかけてきてくれ。ただし、無茶はするなよ?』

『了解です、兄様。』
にっこり微笑んでレーラが答える。
そして、レーラは部屋を出ていった。
『アレン、誰かが来たら頼むぞ。』
シリウスはそう言って目をつぶった。
意識を魔法に委ねたのだろう。この魔法は集中しないと相手に気づかれるおそれがある。
『…しくじるなよ、シリウス。』
アレンが少し疲れたように言った。

アレンは窓から外の様子を確かめる。
神殿の方から大量の煙が上がっているのが見える。それを見てアレンに一瞬、悪寒が走った。大切な物が壊されるような、そんな感覚が。
『どうなってるんだろうな…。』
ひっそりと呟く。自分のこの類いの感覚だけは外れたことが1度もない。
『…早くシルバーパレスに戻れるように願っておくか…。』
何故だかわからないが…。アレンはこの事件を一刻もはやく終わら

せなければならない。そう思った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2177y/

Sirius

2011年11月26日19時51分発行